

子育てほど大事な仕事はない

福井義高

青山学院大学大学院国際マネジメント研究科

令和6年1月23日

今日お伝えしたいこと

- みなさんが自分で考え判断するうえでの材料提供
 - 「べき」論ではなく、現在分かっていることは何か
 - 絶対的真理ではなく、現時点での証拠に基づく知見
- 決定論ではなく確率論
 - 「～ならば必ず～である」ではなく、「～ならば～になる傾向がある」
 - 発達過程への遺伝の影響
 - 人生は不公平、しかし完全に「生物学は運命」ではない
- 主に米国での学術研究に依拠
 - 「べき」論だけではなく、実証研究が盛ん(米以外も対象)

全ての母親は働いている

- 政府も経済界も「母親も働け働け」の大合唱
- 経済統計(GDP)の不十分さ
 - 母親AとBが保育士として働いて、AはBの息子、BはAの娘を保育
 - ⇒GDPに加算され経済成長に「貢献」
 - Aが自分の娘を、Bが自分の息子を自宅で育てる
 - ⇒GDPに加算されず経済成長に「マイナス」
- 子育ては経済活動としても重要
 - 「働く母親」という表現は「白い白馬」と同じ
 - 母親はみんな子育てという仕事に従事

生物である人間にとって最重要の仕事

- 子育てこそ最も重要かつ骨が折れる仕事
 - ヒトは成熟が遅く手がかかる
- 進化心理学・行動遺伝学からみた子育てにおける母親の重要性
 - 生物として、男は数に上限なく父になることが可能
 - 一方、女は多くても10人、せいぜい数名の母
 - ⇒ 男は女ほど自分の子供が可愛くない
 - 離婚後の子供との関わりに大きな差
- 責任感ある父親は母親(妻)と子供のために働く
 - 世の中のたいていの仕事は嫌なことが多くつまらない
 - 妻と子供のことを思うからこそ我慢できる

保育所戦争から国家的プロジェクト

- 米国における保育所戦争 (Day-care War)
 - 保育所の影響をめぐり、1980年代から大論争
- 1990年代に数百億円規模の研究プロジェクト開始
 - 生まれてから15歳まで15年間
 - 10か所約1300人の子供を定期的に追跡調査
- 保育所は子供の発達に負の影響なしを期待
 - 負の影響があるとすれば保育所の質の問題と想定
- ところが...

明らかにになった不都合な真実

- 質の良し悪しに関わらず、保育が早く始まるほど、また時間が長くなるほど、発達にマイナスに影響
 - 乱暴で言うことを聞かないなど問題行動を起こしやすい
 - 独立性ではなく攻撃性
 - 長時間保育で乱暴度は1標準偏差分(偏差値10)高まる
 - 影響は15歳まで続く(追跡調査は15歳まで)
- ただし、高品質の保育所の場合、言語・認知機能に小さなプラスの影響
- 同時に保育される人数と子供同士の関係の重要性
 - 当初問題意識になかったため、十分に調査できず

ちりも積もれば

- プロジェクトを主導した研究者のひとりで、調査結果を正直に報告したジェイ・ベルスキー教授が袋叩きに
- 長時間保育所に預けることはひとつのリスク要因
 - 預けたからといって、その悪影響は小さい
 - 家庭の影響の方が大きく、遺伝の影響も
- しかし、多くの子供が預けられると社会に与える影響は大きくなる
- ベルスキー教授は子供が小さいうちは子育てに専念できる支援制度が望ましいと提言（教授夫人も実践）
 - 物言わぬ子供もそちらを望んでいるのでは

挫折させられたスウェーデンの試み

- 1991年の選挙で万年与党(社民党)が敗北
- 1994年に保守連立政権が数万円の子供手当導入
 - 条件は保育所に預けないこと
- 母親の保育所利用率が6割から3割に減少
 - 今まで非利用でもメリットのなかった4割が最大の受益者
 - 財政にもプラス、失業率も低下
- 1994年の選挙で社民党政権返り咲き
 - 女性の「社会進出」を妨げるとして、直ちに手当廃止

受動喫煙より離婚の方が深刻

- 直接喫煙は寿命を平均的に5～10年縮める
- 受動喫煙にはほとんどマイナスの影響がないというのが研究者のコンセンサス
- 離婚は寿命を平均的に数年縮める
- 離婚は子供への影響も大きい
 - 家庭内暴力などとならんで「子供時代の逆境」に含まれる
 - 米国の80年にわたる追跡調査によれば寿命が4年短縮
- 離婚は公衆衛生の問題

子供に資する伝統的家庭

- 子供の発育にとって最も望ましいのは結婚した実の両親に育てられること
 - 片親、子連れ再婚家庭のみならず、事実婚家庭よりも望ましい
 - 子連れで再婚した場合の虐待は深刻な問題
 - 所得水準の違いを考慮しても、結果は変わらない
 - 北欧諸国でも同様の結果
- 献身的な養親を否定するものではない
 - こうした特別立派な人を除けば、他人の子は実子ほどかわいくない

遺伝か環境か：行動遺伝学と子育て

- 遺伝(DNA)の学力や性格への大きな影響
 - 変動の3～6割
 - 決定論ではなく確率論
- 年齢とともに増す遺伝的要因の重要性
 - お金持ちが小学校お受験に熱心なわけ
- 人間の性質はすべて程度問題
 - 正常・異常の二元論ではなく、程度の問題
- 「一姫二太郎」は行動遺伝学の知見と合致
 - 子供も大人も男の方が女よりばらつきが大きい

家庭教育の限界

- 実の兄弟姉妹は似ている
 - 遺伝的要因はだいたい5割⇒環境の影響は5割
- しかし、同じ家で育っても別々に育っても、やはり5割しか似ていない
 - 学力への家庭環境の影響は年齢とともに低下
 - 大学入試時にはほぼゼロ
- 兄弟姉妹の違いへの家庭環境の影響はほぼゼロ
 - 家庭という共通の環境要因の非重要性
 - 例外は政治信条と宗教
- 子供自身が選ぶ環境の重要性

学校教育の非重要性

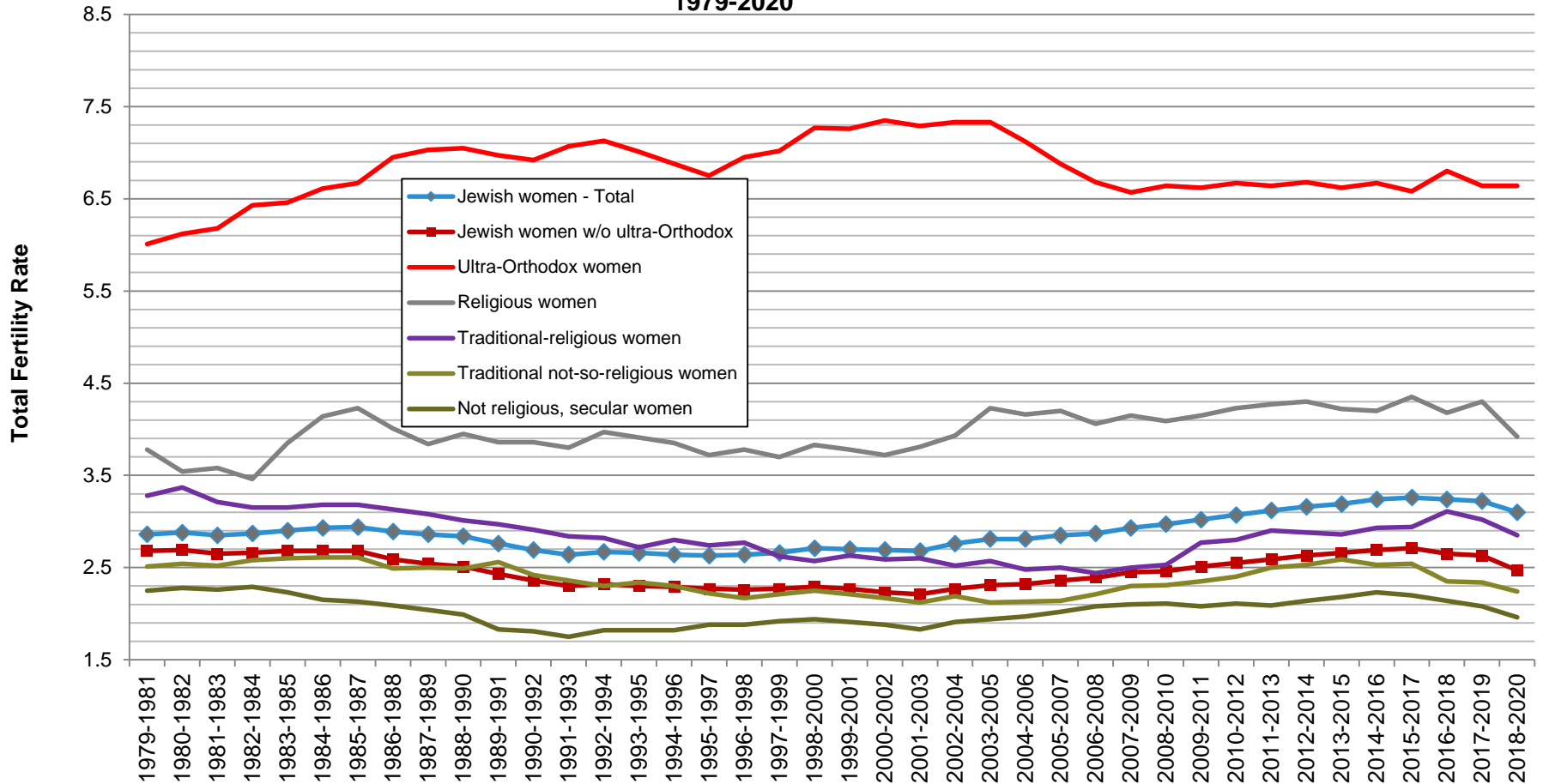
- ×いい学校に行くから勉強ができるようになる
- 勉強ができる子が行くからいい学校とみなされる
 - 子供の学力が同じであれば、有名進学校に行っても、地元の公立中学・高校に行っても同じ
 - 機会の平等を支える大学一般入試選抜
 - 家庭と出身高校の影響が最も小さい選抜方法

平均回帰という必然

- 機会の平等が進むほど、遺伝的要因が重要に
 - 遺伝以外の家庭環境の影響低下
- ただし、共通でない個別環境要因は重要
 - 兄弟姉妹で異なる子供の選択
- 平均回帰という統計的必然
 - 平均以下(以上)の親からはより平均に近い子
- 優秀な親ほど自分の子育てに失望
 - 自分ほど出来が良くないのはある意味当然
 - 子育ての良し悪しとは基本的に無関係

少子化は永遠には続かない 先進国少子化の例外イスラエルのデータから

Diagram 1. Total Fertility Rate (TFR) of Jewish Women, by Level of Religiosity, 1979-2020



子育ては気楽に

- 子供の耐性 (resilience) は意外なほど大きい
- リスクのある子供ほど子育てが重要
- 女性は幼少期にどう育てられたかが自分の子育てにも影響
- 子供はなるようにしかならないという気楽な姿勢で
- ほとんどの子供はよほど子育てがひどくなければ、それなりに育つ

みなさんのご意見をお聞かせください

主な参考文献

- 福井義高(2018)「たばこと離婚どちらが体に悪いか」『正論』12月号108-116頁.
- 福井義高(2023)「子供のため伝統的家庭の尊重を」『産経新聞』3月29日付朝刊.
- J. Belsky (2003) The politicized science of day care: A personal and professional odyssey. *Family Policy Review* 1 (2): 23-40.
- J. Belsky (2009) Quality, quantity and type of childcare: Effects on child development in the U.S., in G. Bentley & R. Mace (eds.), *Substitute Parents*. Berghahn Books.
- J. Belsky et al. (2020) *The origin of you: How childhood shapes later life*. Harvard U. Press.
- D. C. Geary (2021) *Male, female: The evolution of human sex difference*, Third edition. American Psychological Association.
- R. Plomin (2018) *Blueprint: How DNA makes us who we are*. MIT Press.
- R. Plomin et al. (2013) *Behavioral genetics*, Sixth edition. Worth Publishers.
- T. Skånberg (2003) An international child-care policy model: The Swedish child maintenance allowance of 1994. *Family Policy Review* 1 (2): 23-40.